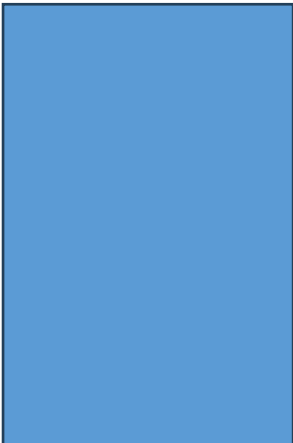


# 「こんなものを読んできた」(12)

「反逆者の月」シリーズ ディヴィッド・ウェーバー (ハヤカワ SF 文庫)

校長・鈴木 健

みなさん、普段どんな本を読んでいますか？ ライトノベルにもいい作品は沢山ありますが、ずっとそれしか読まないというのも「ちょっとね」という気がします。そろそろ読書の次のステップへ、という人におすすめしたいのが、ディヴィッド・ウェーバーの「反逆者の月」シリーズです。



近未来、アメリカ宇宙軍のコリン・マッキンタイア少佐は月の裏側の地質調査をしていたところ、月の内部に複雑な空洞があるらしいことを発見します。そこに謎の飛行物体が出現し、コリンは宇宙艇ごと捕獲され月の地下にある謎の基地に連行されてしまいます。その基地をコントロールするコンピューターは、コリンに、

①地球人が月だと思っているのは、5万年前に太陽系にやってきて、乗組員の反乱のため放棄された「第四帝国」の戦艦ダハクである。  
②ダハクが太陽系にやってきたのは、自分たち以外の生命を全て滅ぼそうとする謎の敵アチュルタニを警戒するためであったが、今やアチュルタニは、地球まであと数年という距離まで迫っている。

③現在の地球人は地球に逃れた、忠実な乗組員と反乱グループの子孫である。忠実な乗組員の子孫は一部を除いては自分たちが何者であるか、という記憶や科学技術を失ってしまったが、反乱グループの方は進んだテクノロジーを保持しており、ダハクを奪って5万年前の反乱を継続しようとしている。

④地球の滅亡を防ぐためには、あと数年のうちに反乱グループを制圧し、第四帝国との連絡を回復して、アチュルタニを撃退できる体制を作らなくてはならない。

という秘密を打ち明け、忠実な乗組員の子孫であるコリンを新艦長に任命し、上記の④のほとんど「無理ゲー」なミッションを託します。さて、コリンと地球の運命は…。というお話です。

いわゆるSFというジャンルには非常に幅広い作品が含まれます。とにかく宇宙船や宇宙人が出れば OK というものから、オカルトに近いもの、科学的な味付けにこだわったハードSF、量子論などにかこつけた「世界系」など様々です。

今回紹介する「反逆者の月」シリーズは、軍事技術や戦略・戦術にこだわったミリタリーSF的な要素と、スケールの大きいスペースオペラ的なストーリーのバランスがうまく取れています。しかも、シリーズ全体の骨太なストーリーを貫きながらもシリーズ 1 作目は近未来ミリタリーSF、2 作目は宇宙艦隊もの、3 作目は歴史+軍事SFと異なるテイストが楽しめます。

これまでライトノベルしか読んでことがないという人が、本格SFを読み始めるのには最適な作品だと思います。ぜひ読んでみてください。